

5. まとめ

本遺跡は、深江井牟田遺跡と同一の古砂丘上にある遺跡で、集落の縁辺にあたり、標高を下げながら、砂丘から湿地帯へと変化する様子が伺えた。

第1面では、弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物や土坑が主体で、調査区南西側で検出された円形溝溝は、建物を囲むものと推測される。谷部へは継続的な土器の集積があり、在地系大形器台がまとまって出土したことは、祭祀を含む意図的な行為と考えられる。

谷部包含層の中層直下で検出した第2面は、弥生時代中期後半～末の掘立柱建物群と土坑、ピットが検出された。土坑内には切断材や転用材を含む木製品が出土した。

①内面朱付着土器

深江城崎遺跡では、谷部包含層より、内面朱付着土器および石杵が出土した。その主体は鉢もしくは甕で、外面が黒色化するほどの二次被熱を受けている。第60図のうち、11、12は弥生時代後期後半～終末期で、その他は弥生時代中期後半～後期前半の層位から出土した。西本和哉氏は、弥生時代中期後葉以降、鉢形土器が朱の調査具として専用器化すること、この土器が、固着剤の膠を調査して加熱する容器と指摘し、野方久保遺跡の鉢形土器を提示した（西本2021）。

一方、半裁甕（60-1）は、底部からの立ち上がりや調整から、弥生時代中期後半～後期初頭に位置付けたが、同例として、川寄吉原遺跡（佐賀県）出土例があり、丸底化する弥生時代後期中頃～後半である。表1は糸島地域における赤色顔料関係資料一覧で、三雲・井原遺跡を中心として、海に面する拠点集落から出土している。船載辰砂の入手を考えると、楽浪系土器を含む外来系土器と無関係ではないと考えられる。

糸島地域における朱の使用を集めた岡部裕俊氏は、三雲南小路遺跡が出現する弥生時代中期末から終末期にかけて、大量の朱が消費されている実態を明らかにした（河野・南・岡部2019）。また、硫黄同位体比の分析から、弥生時代中期末～後期前半にかけて、産地の異なる朱の使用が指摘されており、各時期における朱の流通と使用について、詳細な検討が必要である。

②楽浪系土器・国内外来系土器

本遺跡において楽浪系土器は8点出土している。器種は小形鉢(碗)、小形短頸甕が中心であり、いずれも泥質胎土の瓦質焼成で、時期は、弥生時代後期後半～終末期に比定できる。また、三韓系土器の出土がなく、楽浪系土器が主体となっている。隣地の深江井牟田遺跡では、小形鉢、大形鉢、短頸広口甕が、二丈中学校校内遺跡では鉢が出土している。この器種構成から、公的な通行や度重なる交易結果を示すとする武末純一氏の「カラカミ型」や森本幹彦氏の「B類遺跡、B

番号	遺跡名	出土遺物	時期
1	三雲南小路遺跡	L字状石杵（未使用）、内面朱付着土器	後期前半
2	三雲番上遺跡	辰砂、L字状石杵	後期後半～終末
3	三雲仲田遺跡	辰砂	後期後半～終末
4	築山古墳	石杵	古墳時代前期
5	三雲下西遺跡	辰砂	中期末～後期後半
6	井原塚廻遺跡	石杵（ベンガラ）	中期末～後期前半
7	潤地廻給遺跡	石杵	終末
8	今宿五郎江遺跡	石杵、把手付広口鉢	後期後半
9	元岡・桑原遺跡群	辰砂	中期後半～後期
10	深江城崎遺跡	石杵、内面朱付着土器	中期後半～終末
11	吉井水付遺跡	L字状石杵	後期後半

表1 糸島地域における赤色顔料関係資料出土遺跡一覧表

Ⅱ②」という評価に変化はないものとする（武末2004、森本2010）。

一方、国内各地の外來系土器は、瀬戸内周辺地域を中心に27点出土している。第61図は弥生時代後期後半～終末期の包含層から出土したもので、東九州系～西部瀬戸内系の土器が最も多く、吉備系、東海系、近江以東の土器が少量含まれる。第62図は弥生時代中期末～後期前半の包含層より出土したもので、回線文をもつ瀬戸内系土器は、IV様式末ごろと考えられ、このほかに山陰系や擬近畿系が含まれる。

これにより、本遺跡では西から楽浪系、東から国内外来系が搬入しており、今宿五郎江遺跡と共に、瀬戸内地域を受容拠点であり、山陰地域、東海地域との交流もうかがい知ることができる。（森本2013）

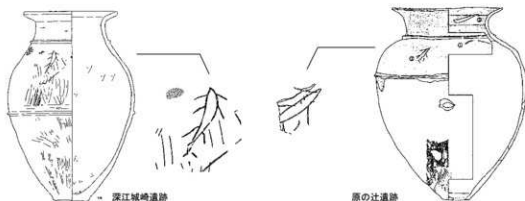
③絵画土器

谷部包含層から出土した弥生時代後期前半に比定される中形壺（43-106）には、外面肩部に「鯨」と思われる線刻が見られる。類例としては、原の辻遺跡石田大原地区23号甕棺墓下甕の例がある。時期は弥生時代中期末で、本例と時期差はあるが、線刻位置や鯨の描き方が共通する部分がある。原の辻例の場合、同土器に線刻文様が3つあり、それぞれ鯨2匹と船1隻と理解され、佐原眞氏はその構図から捕鯨絵画としている。

絵画土器は、弥生前期末から甕棺をキャンバスとして描かれ、題材として鹿が最も多い。その後、鉤、水鳥、建物など種類が増え、壺や木製品への線刻も行われるようになる。糸島地域では、土器で潤地頭給遺跡（龍）、曲り田遺跡（龍）、深江井牟田遺跡（龍）、飯氏遺跡（鉤）、小森遺跡（鹿）、木製品で上鎌子遺跡（鹿、釣針、建物、人物）、元岡・桑原遺跡群（鹿、建物、鳥）などで出土している。本例のような「鯨」を題材とする絵画は少なく、管見の限り2例目となる。糸島では、鯨骨製品の出土は見られないが、御床松原遺跡や海徳寺遺跡では、包含層からクジラ類の骨が出土しており、消極的ではあったにせよ、ある程度のクジラの捕獲があったものと推測される。

④木製品

本遺跡では、谷部包含層および第2面の土坑やピットから多数の木製品が出土している。谷部包含層からは、農具・容器を中心として、案の天板や船材、背負子などが出土する。全体的に精巧品は少なく、第78図15の列物容器が最も精巧であるが、把手付槽（79-23）のような未成品やねずみ返し転用品（83-45、84-57、58、89-97～99）など加工途中もしくは転用品が多い点が特



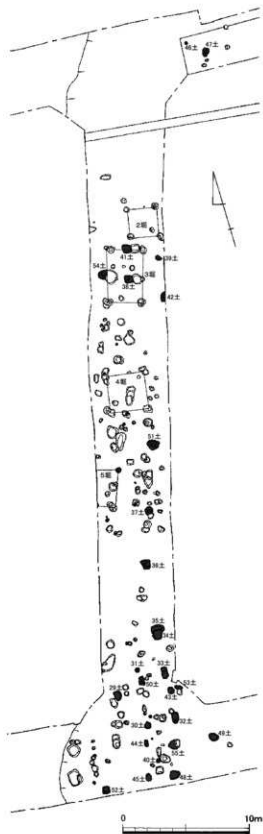
第91図 深江城崎遺跡および原の辻遺跡出土絵画土器比較図（1/4、1/12）

微である。

一方、遺跡の第2面は、掘立柱建物4棟（1×1間2棟、1×2間1棟、1×α間1棟）と27基の土坑群で構成され、土坑内からは、切断材や転用材が出土している。土坑群は、谷部の標高3.2～3.8m付近に、南北方向に並ぶ。検出地点は、地下水位が高く、豊富な湧水があるため、それを考慮した土坑設置と見られる。また、土坑群のうち、37、41、42、43、50、52、55号土坑は、礎板をもつ柱穴の可能性があるが、掘立柱建物として認識できなかったため、土坑として報告しており、今後の調査の進展によっては、遺構認識が変わる可能性がある。

木器の製作工程は、伐採→製材（分断・分割）→加工→仕上げに分けられ、製品化の中で、適宜水付けと乾燥が繰り返される（飯塚2022）。このうち、分割は分断材を分割するために、小口に楔を打ち込んで割とっていく工程で、本遺跡で出土する楔（82-39）は「割材型」である（村上2002）。工程順にみていくと、分割の最初である半裁材は30号、32号、36号、51号、54号の各土坑で出土している。出土した半裁材は、同一分断材を半分に分割したものであり、長さ30～40cm、幅10～16cm、厚さ4～8cmのものが多い。また、51号土坑の第89図100、101は、別材ではあったが、共に同一規格で、分断されていることが分かる資料である。これらの土坑は、南北に20～30m間隔で配置されており、水漬けと加工のサイクルがあったものと想定できる。

続いて、半裁後は、板目取りの場合、半裁材の樹皮側を最初に削り、続いて側面加工と平滑加工を行い、板材を作出する。34号土坑（85-62）、37号土坑（85-69）、41号土坑（86-76）、47号土坑（87-84～88）は、この段階における最初の材で、このうち47号土坑は、その工程で発生した木屑（85～88）と板材（84）が出土している。平滑加工を施す板材は、29号土坑（84-51）、34号土坑（85-63）、42号土坑（86-70、71）、43号土坑（87-80）、



第92図 木器生産遺構位置図 (1/300)

48・50号土坑(88-93, 94)、53号土坑(89-95, 96)で出土する。これらの土坑は、調査区南側の一角に集中して見られる。

一方、柱目材は、端材が多く、**包含層**(84-49, 50)、**34号土坑**(85-59～61)、**38号土坑**(86-72, 73)などがあり、**36号土坑**(85-65)、**54号土坑**(86-75)から出土する芯持ち材も柱目取りの際に発生する木屑の可能性が高い。

以上、土坑から出土する切断材を見てきたが、板目材が多く、①丸太を半分割②剖面に平行して分割③粗く平滑にするという分割工程が復元できる資料が揃っている反面、製品化に至る加工段階の資料が少ない点は重要である(4点、75-6, 7, 8, 76-11, 79-18)。本遺跡の集落は、堅穴式住居ではなく、掘立柱建物が主体となる集落であり、古砂丘上の軟弱地盤上に立地している。掘立柱建物の柱穴では、板目材やネズミ返し転用品を礎板としており、礎板の需要が高かった可能性がある。したがって、これら遺構群の分割工程で作出された板材は、木製品の素材としてだけではなく、礎板用としても利用されたものと考えておきたい。

周辺の遺跡では、大坪遺跡から甕棺の底板に転用された扉板が出土しており、弥生時代前期中頃には、木器製作されている。また、深江中道遺跡では漆塗把手付容器が出土するなど木器製作が盛んな地域と考えられる。本遺跡の木器生産は、同時期に木器生産している上鎌子遺跡や元岡・桑原遺跡群、今宿五郎江遺跡とも異なる様相であり、弥生時代中期後半～弥生時代終末期に至る包含層から木製品が出土していることから、将来的に加工工程を行う作業場が検出されれば、規模の大きい専用工房の成立が視野に入るものとする。

⑤まとめ

これまで、深江井弁田遺跡の調査成果から、「伊都国」の西の玄関口と目されていたが、今回の調査で、外来系土器や朱生産、木器生産など新たな拠点集落像が明らかとなり、今後の調査の進展を期待するとともに、他の拠点集落との比較検討を通じた分析が必要である。

【参考文献】

本書の執筆において、参考にした文献を以下にまとめて掲載する。

飯塚武司2012『木工の考古学』雄山閣

井上祐弘編1983『熊本県史跡誌 志摩文化財調査報告書第3集』

大野五平夫1981『石鐘についての発見』『古代学研究』95

河野肇・南武志・岡部祐哉2019『糸島地方における弥生～古墳時代の赤色顔料』『伊都歴史博物館紀要』14

藤原基一1996『創形模造品の製作技法』『研究紀要』4 熊本県文化財調査事業推進センター

下條信行1984『弥生・古墳時代の九州型石鐘について』『九州文化史研究』92

武末純一2004『遺物からみた東海郡と北九州の交流-土器を中心に-』『海を越えたメッセージ-東海交流展』伊都歴史博物館

熊本県史2019『熊足2本材調査の考古学的検討』『八日市地方誌』V 小市埋蔵文化財センター

中尾篤志2012『玄界灘と対馬海峡の海と弥生人』『考古学ジャーナル』763

西本和哉2011『弥生時代の赤色顔料調査』『古代学』73:3

林田好子・中尾篤志2014『九州型石鐘の集積と展開』『研究紀要』4 長崎県埋蔵文化財センター

平尾和久2008『玄界灘の編年とその展開』『伊都歴史博物館紀要』3

平尾和久編2020『熊足遺跡』糸島市文化財調査報告書第22集

村上由美子2002『木製機の基礎的研究』『史料』85巻4号史学研究会

森貴哉2016『織物の消費形態からみた鉄器化とその意義』『考古学が科学か』上

森本幹彦2010『玄界灘沿岸地域における朝鮮系土器の検出-弥生時代後期前後の集落系土器と三韓系土器の検出-』『日本出土の朝鮮系土器の再検討-弥生時代を中心に-』埋蔵文化財研究会

森本幹彦2013『博多湾沿岸地域における外来系土器の検出-弥生時代後期を中心に-』『平成25年度九州考古学会総会 研究発表資料集』九州考古学会

樋田康雄1985『熊足先』『弥生文化の研究』5 道具と技術1

第4章 深江城崎遺跡における樹種同定および種実同定

一般社団法人 文化財科学研究センター

金原美奈子 金原裕美子

1. 樹種同定

1. 原理

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 試料と方法

試料は、斧柄などの工具、広鋸、直柄鋸などの農具、槽などの容器、杓子、腰掛けなどの日用品、紡錘車などの紡織具、ねずみ返し、梯子などの建築材などの木製品の108点である。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柎目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick “Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって40～1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表1に結果を、表2に樹種と器種の相関を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。

2) マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行はゆるやかで、多くの樹脂細胞が散在して見られる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。

3) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスピ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見

られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。

4) クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には比較的緩やかな鋸歯状の肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からクロマツに同定される。クロマツは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で高さ35m、径2mに達する。材は耐朽性、保存性が中庸で水湿によく耐え、広く用いられる。

5) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmくらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。

8) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。

9) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が1~2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1~7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。

10) クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科

中型から大型の道管が、単独および2～数个放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴からクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。

11) クスノキ科 Lauraceae

中型から小型の道管が、単独および2～数个放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外が不明瞭なため、クスノキ科の同定にとどめる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

12) イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。多室の直立細胞には菱形結晶が見られる。

以上の特徴からイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

13) サクラ属 *Prunus*バラ科

樹木の樹皮であり、暗褐色を呈し、やや赤みを帯び、肌目が横に伸びる。

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属の樹皮に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

14) センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科

年輪のはじめに大型の道管が、やや疎に配列する環孔材である。孔圏部外の道管は単独または2～3個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管および中型の道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からセンダンに同定される。センダンは、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、

径1mに達する。

15) マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科

年輪のはじめに、大型で丸い道管が、単独で1~3列配列する環孔材である。孔部外側の道管はほぼ単独で、早材から晩材にかけて道管の径はやや急に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。年輪幅は不齊で年輪界が波打つ傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性放射組織型であり、1~4細胞幅で単列翼部が長い。

以上の特徴からマタタビ属に同定される。マタタビ属にはサルナシ、マタタビなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉性藤本である。

16) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいいである。放射組織は異性放射組織型で、1~3細胞幅であり、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。

17) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいいである。放射組織は、異性放射組織型で、1~3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものがあり、結晶細胞が見られる。

以上の特徴からツバキ属に同定される。ツバキ属にはヤブツバキ、サザナカなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。

18) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。

19) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で1~3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。

20) シャシヤンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科

小型で角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、6~8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。

以上の特徴からシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木で、通常高さ1～5m、径10cmぐらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

21) カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

中型の道管が、単独および放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。接線断面ではいずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層状に配列し、リップルマークを呈する。

以上の特徴からカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキ、マメガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

4. 所見

同定の結果、深江城崎遺跡の木製品はカヤ2点、マキ属5点、モミ属1点、クロマツ10点、スギ6点、クリ6点、スダジイ15点、コナラ属アカガシ亜属7点、ケヤキ1点、クスノキ27点、クスノキ科2点、イスノキ2点、サクラ属1点、センダン1点、マタビ属1点、ヤブツバキ1点、ツバキ属1点、サカキ2点、ヒサカキ属4点、シャシャンボ6点、カキノキ属7点であった。

斧柄にはヤブツバキ、サカキが利用されており、いずれも強靱で堅硬な良材であり、耐朽性があるため農具や工具の柄に適材である。農具ではコナラ属アカガシ亜属が多く、他にスダジイ、サカキ、ヒサカキ属が利用されている。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材で弾力もあり、耐朽性に優れ、粘り気があることから強度が高く、耕作作業などで幾度も力が加わる農具に適材である。また西南日本では弥生時代以降コナラ属アカガシ亜属は特に農具に用いられる傾向にある。サカキは堅硬で強靱な材で、ヒサカキ属はサカキには劣るがサカキの代替品ともされ、いずれも農具柄に用いられる樹種である。なお、サカキは背負子部材に用いられているが、耐朽性があることから用いられたものと考えられる。一方でスダジイはやや重硬で耐朽・保存性はややある樹種であるが、農具には向きである。しかし九州では古くからスダジイを含むシイ属を多く利用する傾向にあり、これにはシイ属が二次林種にもなり、暖かい気候により成長も早いことから近隣に多く生育していたため容易に利用できたことが考えられる。

容器にはカヤ、マキ属、スギ、スダジイ、クスノキ、カキノキ属が用いられている。カヤ、マキ属、スギは耐朽・保存性の高い樹種であり、また加工が容易な針葉樹である。またクスノキ、カキノキ属はいずれも堅硬で耐朽性があり容器に適材で、スダジイは椀や鉢などの容器に用いられる。

杵子には主にマキ属が用いられており、他にスダジイ、ケヤキ、クスノキが用いられている。ケヤキ、クスノキは耐朽・保存性が高く水湿によく耐える材のため適材だが、スダジイは耐朽・保存性がややある材である。前述したとおりスダジイは近隣に多く生育していたことから用いられたと考えられる。なお、杵子にマキ属が用いられる傾向は上籬子遺跡でも見られる。腰掛、作業台にはクスノキが、案天板にはカヤが、独楽にはセンダンが用いられている。耐朽性が高いことからクスノキは腰掛けや作業台に適材であり、カヤは表面の仕上げが良好で光沢が出るため案天板に用いられたと考えられる。センダンは木目が明瞭で加工性が高く、耐朽性はやや劣るが防蟻・防虫作用があり家具、器具の他に細工物や工芸に適材とされ、彫刻、寄木などに用いられ、用途は様々である。

紡錘車にはイスノキが用いられており、耐朽・保存性に優れた適材である。輻輳細工や櫛に用いられることが多いが、弥生時代後期から古墳時代初頭の福岡県金山遺跡においてもイスノキの紡錘車（紡輪、軸）が報

告されている。

ヤスにはクロマツが、アカトリアおよび船部材にはクスノキが用いられている。クロマツ、クスノキは耐朽・保存性が高く水湿によく耐える材であり、いずれも船具や船部材に適材である。

ねずみ返し、梯子、建築材などの建築材にはクロマツ、クスノキが用いられている。いずれも水湿によく耐え腐りにくく、建築材に適材である。また、クスノキは芳香が強く防腐・防虫作用があり、ねずみ返しや梯子などがあるような貯蔵用の建物に利用されたのはその効果が期待されてのことと考えられる。

木製円盤にはツバキ属が、着装具にはコナラ属アカガシ亜属が、棒状木製品、楔形木製品にはクロマツ、スダジイが、用途不明品にはスギが用いられている。ツバキ属は強靱で耐朽性が高く、建築材や船材の他に彫刻などに用いられる。コナラ属アカガシ亜属は堅硬で粘り気があり耐朽性にも優れ、水湿にも強い材で、広汎な用途である。クロマツ、スダジイは重硬で耐朽性が比較的高く、いずれも九州沿岸地域ではよく用いられる材である。スギは木理通直で切削・加工が容易で、軽軟だが強靱で幅広く用いられる。板材、丸太半裁材、端材、加工材は製材途中のものや製作過程で不要となった材もあるとみられ、モミ属、クロマツ、スギ、クリ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ、クスノキ科、ヒサカキ属、シャシャンボ、カキノキ属が用いられている。クロマツ、スギ、クリ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ、クスノキ科、カキノキ属は耐朽・保存性が高く、水湿にもよく耐える材である。なお、クリ、クスノキ、クスノキ科は含まれるタンニンや芳香などにより防虫作用がある。モミ属、スダジイは比較的耐朽・保存性は低いが、クリやクスノキのように防虫作用がある。いずれも建築材や杭や矢板などの施設材にも見られる。建物や施設に用いるために選材したものと考えられる。他では、ヒサカキ属は強さ中庸で、シャシャンボは強靱で堅硬な材で従曲性が大きい材であり、杭や農具柄などの棒状の木製品としての利用が多く、板材としての利用はややめずらしく、板材として利用できるほどの大きさまで成長したのは九州の温暖な気候のためと考えられる。樹皮材はサクラ属、葛はマタタビ属であった。サクラ属の樹皮は曲物の綴じ皮や、光沢があるため茶筒などの容器の装飾として樺細工などに用いられる。マタタビ属の蔓は強靱で腐りにくいため筏を結ぶのに用い、長く成長するためかざら橋の材料とされていた。

同定された樹種はいずれも温帯から温帯下部の暖温帯や暖地に分布する樹木であった。コナラ属アカガシ亜属、クスノキは陽当たりの良い山野に分布する照葉樹林の主要高木であり、その構成要素としてイスノキ、サカキ、ヒサカキ属も生育していた。マキ属、モミ属は山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み、スギは肥沃で湿潤な環境を好む。クリは乾燥した台地や丘陵地を好み、カキノキ属は陽当たりの良い尾根筋や緩傾斜地を好み、サクラ属は排水のよい斜面地に生育する。カヤ、ケヤキは適潤な谷沿いなどやや湿潤な所に生育し、マタタビ属はその上流の沢筋や斜面に生育する。ヤブツバキ、ツバキ属は海岸から河川の沿岸に分布し、スダジイ、クスノキ、センダン、シャシャンボは耐塩性があり暖地の海岸沿いに分布し、クロマツは海岸林を形成していた。これらの樹木は深江湾の海岸沿いや南部の山林など当時遺跡周辺に分布しており、周辺地域の豊富な資源を利用したものと考えられる。なお、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキが農具、容器、日用具、漁具、建築材、製作過程の木材など多様な用途に見られるのは、周囲に多く生育していた樹木を用いたことが考えられる。その中でマキ属は主に杓子に用い、建築材にはクロマツやクスノキを用いるなど、周辺に生育する樹木を無作為に用いたのではなく、耐朽性や水湿に耐える材など木の性質を意識して選材していることがわかる。

II. 種実同定

1. 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料と方法

試料は、P219、P396、P422、P438、調査区中央北側、調査区南側8層黒色土、16層調査区南側谷部包含層、17層、谷部包含層17層、土器群A土器6（番号28）より出土した種実である。

方法は試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

(1) 分類群

樹木4、草本1の計5分類群が同定される。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

1) マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* 毬果(完形・破片) マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果皮 プナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗、つき部の先端が欠落し、属レベルの同定までである。

3) モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。モモの計測値は平均長さ26.37mm×幅21.15mm×16.10mm、最小長さ19.06mm×幅16.98mm×12.71mm、最大長さ32.69mm×幅25.76mm×20.37mmであった。

4) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子(完形・破片) ムクロジ科

灰黒色で円状球形を呈し、線形のヘソがみられる。

[草本]

5) ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子(完形・破片)・果皮(破片) ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

(2) 種実群集の特徴

P219からモモ1個、P396からモモ2個、P422からモモ1個、P438からモモ1個、調査区中央北側からヒョウタン類種子78個、破片23個、果皮破片1個、調査区南側8層黒色土からマツ属複雑管束亜属毬果破片1個、モモ1個、16層調査区南側谷部包含層からモモ1個、17層からムクロジ種子17個、破片9個、果実1個、谷部包含層17層からマツ属複雑管束亜属毬果1個、コナラ属アカガシ亜属1個、モモ12個(うち1個齧歯類噛み痕)、半形2個、破片8個、土器群A土器6(番号28)からモモ1個が同定された。

4. 種実同定から推定される植生と栽培

多く同定された樹木種実のモモは、栽培植物であり、排水の良い斜面地等を好む。コナラ属アカガシ亜属は温帯を中心に広く分布する照葉樹林の主要構成要素である。マツ属複雑管束亜属は土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツとがあり、海岸に近いクロマツが推定される。ムクロジは日当たりのよい谷沿いなどの適潤地を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布する落葉広葉樹である。草本種実のヒョウタン類は栽培植物であり、日当たりと風通しのよい場所で生育し、古くは縄文時代からも出現する。モモ、コナラ属アカガシ亜属、ヒョウタン類(幼果)は食用になり、モモとヒョウタン類は栽培植物でもある。また、ムクロジは有用植物である。

同定の結果、深江城崎遺跡より樹木種実のマツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、モモ、ムクロジ、草本種実のヒョウタン類が同定された。モモは食用となる栽培植物であり、稲作と共に伝来する。多くの遺跡から出土し、食用、薬用、祭祀等に利用され、弥生時代から古墳時代にかけて多くなる。ムクロジは谷沿いや河川沿いの分布要素であり、クロマツは海岸林として深江湾沿岸に分布していた。コナラ属アカガシ亜属、ヒョウタン類は各時期から出土例があり、食用になる。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久(2012)木の考古学, 雄山閣, 449p.
- 元興寺文化財研究所(2004)手光於緑遺跡出土木器一覽表, 手光於緑遺跡 福岡町健康福祉総合センター建設に伴う発掘調査報告書, 福岡町文化財調査報告書第17集, 福岡町教育委員会, p. 59-61.
- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.
- 汐見真・岡田文男(1999)出土木製品の樹種について, 金山遺跡I・V区-都市計画道路横代28号線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告4, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第223集, (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, p. 67-140, p. 157-176.
- 島地謙・伊東隆夫(1982)図説木材組織, 地球社, 176p.
- 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 笠原安夫(1985)日本雑草図説, 養賢堂, 49p.
- 笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p. 131-139.
- 金原正明(1996)古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナルNo. 409, ニューサイエンス社, p. 15-19.
- 南木睦彦(1991)栽培植物, 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p. 165-174.
- 南木睦彦(1993)葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.

表1 樹種同定結果

点数	番号	出土品種	品類	樹名(学名/和名)	備考
1	4	木部I	工板	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
2	5	木部I	切込不明品	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
3	6	木部I	樺(実)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
4	7	木部I	榎(子)	<i>Podocarpus</i>	マキ属
5	8	木部I	榎(葉)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
6	9	木部I	樺(子)	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
7	10	木部I	片手音階形手	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
8	11	土器群D木部I	片手音階形	<i>Podocarpus</i>	マキ属
9	12	木部I	杉(葉)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
10	13	木部I	榎(子)(木製品)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
11	14	木部I	行子	<i>Zelkova serrata</i> Makino	クヌギ
12	15	P-412	榎板(杉ずみ返し転用)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
13	16	木部I	榎(葉)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
14	17	木部I	榎(葉)	<i>Cleome japonica</i> Thunb.	ササカ
15	P-413	木部I	榎(木製品)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
16	19	土器群A	木製結線束	<i>Dioscorea racemosa</i> Sieb. et Zucc.	イヌノキ
17	20	土器群A土器I	木製結線束	<i>Dioscorea racemosa</i> Sieb. et Zucc.	イヌノキ
18	21	17層木部I	榎(木製品)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
19	22	木部I	榎(葉)	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
20	23	木部I	榎	<i>Ilex</i>	ヒサカキ属
21	24	パイン層下段彩色転用	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
22	25	17層木部I	榎	<i>Ilex</i>	ヒサカキ
23	26	木製着色土	漆(漆)	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
24	27	17層木部I	榎(漆)塗不明品	<i>Mela azadirach L. var. adspersata</i> Mak.	センブリ
25	土器群A土器I	何品	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属	モト標(誤)
26	29	P-414	漆(漆)	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
27	30	P-520	アコリ?	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
28	31	木部I	榎(子)	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
29	32	調査区南端	榎(葉)	<i>Cleome japonica</i> Thunb.	ササカ
30	33	調査区南端(榎着色土)	榎(葉)	<i>Gomelia japonica</i> Lam.	ヤブコバシ
31	34	出土層不明	榎(葉)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
32	35	調査区南端(榎着色土)	榎(葉)	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
33	36	P-413	榎(葉)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
34	37	出土層不明	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
35	38	P-522	榎板(杉ずみ返し転用)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
36	39	木部I	榎(板)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
37	40	木部I	榎	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
38	41	P-512-1/319	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
39	42	P-512-1/319	榎	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
40	43	P-522	榎板(杉ずみ返し転用)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
41	44	P-409	榎	<i>Ilex</i>	ヒサカキ属
42	45	木部I	榎(子)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
43	46	木部I	木製内板	<i>Gomelia</i>	ツバキ属
44	47	P-407	榎	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
45	48	P-407	榎	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
46	49	土器群C土器I	行子	<i>Podocarpus</i>	マキ属
47	50	木部I	榎(漆(榎材)転用)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
48	51	P-504	榎	<i>Ilex</i>	ヒサカキ
49	52	P-504	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
50	53	P-523	丸太半線材	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
51	54	P-490	榎(葉)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
52	55	P-490	榎(葉)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
53	56	P-490	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
54	57	P-490	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
55	58	P-497	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
56	59	土器群D土器I	榎(木製品)	<i>Podocarpus</i>	マキ属
57	60	P-504	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
58	61	土器群C土器I	榎(行子)転用	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
59	62	P-491	榎	<i>Laurotaxa</i>	クマノ木科
60	63	P-491	榎	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
61	64	P-491	榎	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
62	65	P-497	榎(木製品)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
63	66	P-497	榎(木製品)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
64	67	P-421	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
65	68	P-507	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
66	69	P-507	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
67	70	P-507	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
68	71	P-507	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
69	72	P-517	榎(方形板あり)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
70	73	P-517	榎(木製品)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
71	74	P-523	丸太半線材(1/3)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
72	75	P-421	丸太半線材(1/3)	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
73	76	P-428	杉(木製品)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
74	77	P-523	丸太半線材(18cmあり)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
75	78	P-497	榎(漆(榎材)転用)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
76	79	木部I	榎(漆(榎材)転用)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
77	80	木部I	榎(漆(榎材)転用)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
78	81	P-440	榎(コゴイチ)	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
79	82	P-431	榎(コゴイチ)	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
80	83	17層土器群I付木	榎(コゴイチ)	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
81	84	P-507	榎(コゴイチ)	<i>Ilex</i>	ヒサカキ属
82	85	P-521	榎(コゴイチ)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
83	86	P-521	榎	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
84	87	P-421	丸太半線材(1/3)	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
85	88	P-521	丸太半線材(1/3)	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
86	89	木部N	榎	<i>Artichia</i>	マツカズ属
87	90	P-432	榎(漆(漆)し込みあり)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
88	91	P-413	杉(木製品)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
89	92	土器群I木部I	榎(漆(榎材)の裏)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
90	93	P-434	丸太半線材	<i>Laurotaxa</i>	クマノ木科
91	94	P-434	榎(コゴイチ)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
92	95	P-434	榎(コゴイチ)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
93	96	P-434	榎(葉)	<i>Gastropis sieboldii</i> Hattoma	スズロイ
94	97	木部I	杉(木製品)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
95	98	木部I	杉(木製品)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
96	99	P-413	丸太半線材(1/3)	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
97	100	P-413	丸太半線材	<i>Diopyrus</i>	カキノ木属
98	101	P-431	丸太半線材	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
99	102	P-431	丸太半線材	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
100	103	P-431	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
101	104	P-431	榎(葉)	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
102	105	木部I	榎(葉)	<i>Facitium bracteanum</i> Thunb.	ヤシヤンゴ
103	106	出土層不明	榎	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
104	107	P-511	榎	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカゴシ亜属
105	108	16, 17層土器群I	榎(木製品)	<i>Pinus thumbergii</i> Part.	クロマツ
106	109	17層調査区中央	榎(葉)	<i>Conium maculatum</i> Presl	クマノ木
107	110	16, 17層調査区中央土器群I	榎	<i>Podocarpus</i>	マキ属
111	111		榎(榎材)	<i>Pinus</i>	マツカズ属

表2 樹種と器種の相関

	カヤ	マキ属	モミ属	クロマツ	スギ	クリ	スダジイ	コナラ	アカガシ	亜属	ケヤキ	クスノキ	クスノキ科	イスノキ	サクラ属	セシダン	マタヒバ	ヤブツバキ	ツバキ属	サカキ	ヒサカキ属	シヤシヤンボ	カキノキ属	器種別計
工具	斧柄																	1						2
農具	広鋸							1																1
	直柄鋸							2																2
	鋸?							1																1
	鋸部材						1																	1
	柄(柄頭)							1														1		2
背負子部材																					1			1
容器	槽(把手付槽)				1						2												1	4
	槽把手(片手容器把手)	1			1																			2
	蓋										1													1
	把手つき槽の蓋?						1																	1
	椀形木製品		1																					
日用品	容器	1									2													3
	杓子	1						1																2
	横杓子										1													1
	縦杓子	1																						1
	杓子柄頭	1																						1
	杓子状木製品						1																	1
	腰掛け											1												1
	作業台?											1												1
	案天板	1																						1
	独楽?																1							1
紡織具	紡織束											2												2
漁具	ヤス			1																				1
	アカトリ?										1													1
建築材	船部材										1													1
	ねずみ返し			1							6													7
	梯子										1													1
その他	建築材?			1																				1
	木製円盤																		1					1
	着装具						1																	1
	棒状木製品		1																					1
	楔形木製品			1		2																		3
	用途不明品				1																			1
	板材(有孔板材)		1	4	2	3	5	1		9	1										3	4	1	34
	丸太半蔵材					1	2			1	1											1	5	11
	端材			1	1	2	3																	7
	加工材																					1		1
	樹皮材														1									1
葦																	1						1	
樹種別計	2	5	1	10	6	6	15	7	1	27	2	2	1	1	1	1	1	1	1	2	4	6	7	108

表3 種実同定結果

出土遺構	分類群 学名/和名	部位	個数	備考
P219	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1
P396	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2
P422	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1
P438	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1
調査区中央北側	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子	78
			破片	23
			破片	1
調査区南側8層黒色土	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	果皮	1
	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	破片	1
16層調査区南側谷部包含層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1
17層	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	種子	17
			破片	9
			果実	1
谷部包含層17層	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	果皮	1
	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	5
			半形	1
谷部包含層17層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2
			破片	5
谷部包含層17層	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	果皮	1
	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	5
			半形	1
			破片	3
土器群A土器6(番号28)	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1

表4 モモ核計測値

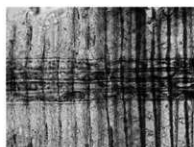
出土遺構	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
P219	25.37	18.80	15.07	
P396	31.05	22.78	17.09	
	23.32	17.57	13.42	
P422	28.05	25.66	17.14	
P438	31.20	24.91	17.69	
調査区南側8層黒色土	24.23	18.40	13.83	
16層調査区南側谷部包含層	25.61	21.24	16.50	
谷部包含層17層土器群C	32.69	25.76	20.37	
	23.07	20.41	15.51	
	26.09	17.71	14.88	
	20.57	18.43	12.71	
	21.17	19.21	15.29	
	29.73	22.53	—	
	28.25	22.48	16.02	
	26.69	16.98	—	噛み痕
	30.41	25.60	19.75	
	28.68	22.65	17.86	
	28.25	21.44	17.34	
	22.08	19.48	16.11	
	19.06	18.57	14.71	
	27.78	24.54	—	
土器群A土器6(番号28)	26.76	20.21	14.59	

	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
平均値	26.37	21.15	16.10
最小値	19.06	16.98	12.71
最大値	32.69	25.76	20.37

木材写真 I



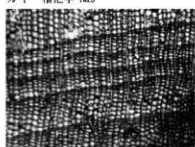
横断面
カヤ 櫛杷手 №9



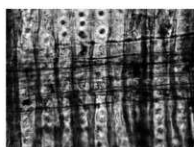
放射断面



接線断面



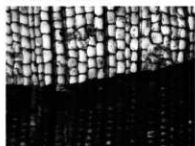
横断面
マキ属 巖子子 №7



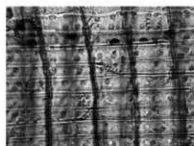
放射断面



接線断面



横断面
モミ属 板材 №25



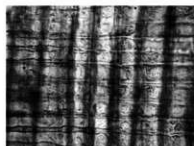
放射断面



接線断面



横断面
クロマツ 楔形木製品 №21



放射断面



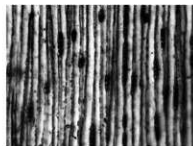
接線断面



横断面
スギ 槽(朱) №6

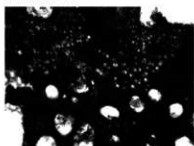


放射断面

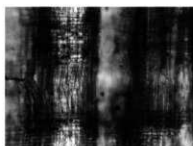


接線断面

木材写真 II



横断面
クリ 板材(角材) No.95
— 0.1mm



放射断面
— 0.1mm



接線断面
— 0.1mm



横断面
スタジイ 鉄部材 No.54
— 0.1mm



放射断面
— 0.1mm



接線断面
— 0.1mm



横断面
スタジイ 板材 No.52
— 0.1mm



放射断面
— 0.1mm



接線断面
— 0.1mm



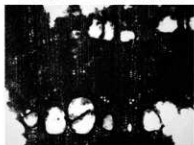
横断面
コナラ属アカガシ亜属 鉄? No.107
— 0.1mm



放射断面
— 0.1mm



接線断面
— 0.1mm



横断面
ケヤキ 杓子 No.14
— 0.1mm

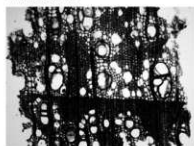


放射断面
— 0.1mm

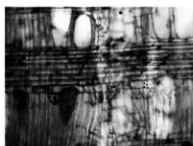


接線断面
— 0.1mm

木材写真 Ⅲ



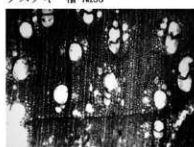
横断面
クスノキ 槽 No.38 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



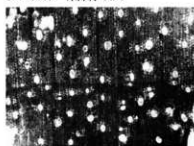
横断面
クスノキ 鉄部材 No.71 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



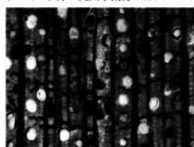
横断面
クスノキ科 丸太半葦材 No.93 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



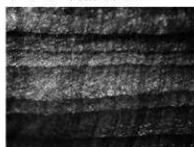
横断面
イスノキ 木製紡錘車 No.19 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面
サクラ栲 樹皮材 No.114 0.1mm



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm

木材写真 IV



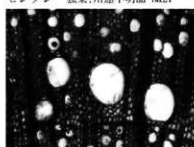
横断面 0.1mm
センダン 独来?用途不明品 No.27



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



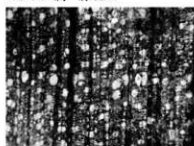
横断面 0.1mm
マタタビ属 島 No.89



放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm
ヤブツバキ 斧柄片 No.33



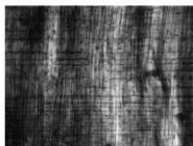
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm
ツバキ属 木製内板 No.46



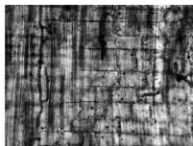
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm
サカキ 背負子部材 No.32

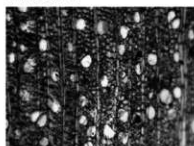


放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm

木材写真 V



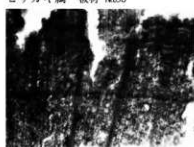
横断面
ヒサカキ属 板材 №83 — 0.1mm



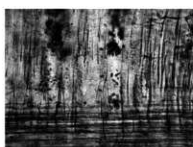
放射断面 — 0.1mm



接線断面 — 0.1mm



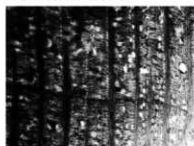
横断面
シヤシヤンボ 板材 №80 — 0.1mm



放射断面 — 0.1mm



接線断面 — 0.1mm



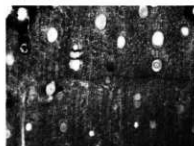
横断面
シヤシヤンボ 加工材 №104 — 0.1mm



放射断面 — 0.1mm



接線断面 — 0.1mm



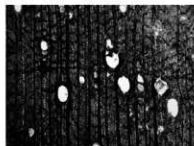
横断面
カキノキ属 丸太半裁材 №100 — 0.1mm



放射断面 — 0.1mm



接線断面 — 0.1mm



横断面
カキノキ属 短甲 №115 — 0.1mm

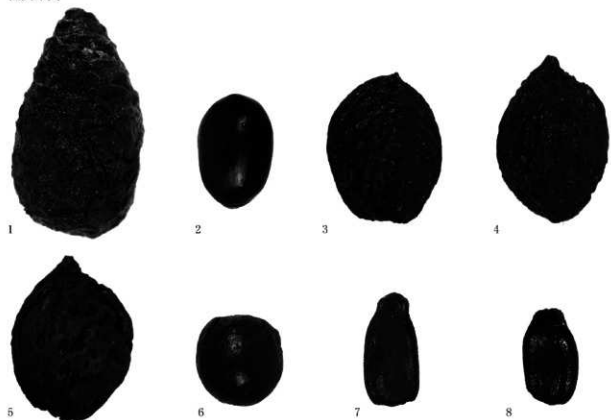


放射断面 — 0.1mm



接線断面 — 0.1mm

種実写真



- 1 マン属複雑管束亜属坚果 (谷部包含層17層)
 2 コナラ属アカガシ亜属果実 (谷部包含層17層)
 3-5 モモ核 (3:P422, 4:P438, 5:P396)
 6 ムクロジ種子 (17層)
 7,8 ヒョウタン類種子 (調査区中央北側)

1, 3-5 5.0mm
 2, 3 5.0mm
 7, 8 5.0mm

表5 深江城崎遺跡遺構番号対照表

十坑				欠番
新番号	旧番号	新番号	旧番号	
sk-01	sk-01	sk-29	p-409	p-409
sk-02	sk-02	sk-30	p-413	p-413
sk-03	sk-07	sk-31	p-427	p-421
sk-04	sk-08	sk-32	p-421	p-427
sk-05	sk-10	sk-33	p-428	p-428
sk-06	sk-06	sk-34	p-431	p-431
sk-07	sk-04	sk-35	p-432	p-432
sk-08	sk-03	sk-36	p-434	p-434
sk-09	sk-05	sk-37	p-440	p-440
sk-10	sk-14	sk-38	p-490	p-487
sk-11	sk-12	sk-39	p-494	p-490
sk-12	sk-09	sk-40	p-520	p-491
sk-13	sk-13	sk-41	p-497	p-494
sk-14	sk-11	sk-42	p-487	p-497
sk-15	sk-24	sk-43	p-504	p-504
sk-16	sk-17	sk-44	p-514	p-507
sk-17	sk-16	sk-45	p-513	p-511
sk-18	1号十坑	sk-46	p-511	p-512
sk-19	sk-18	sk-47	p-507	p-513
sk-20	sk-21	sk-48	p-512	p-514
sk-21	sk-19	sk-49	p-515	p-515
sk-22	sk-15	sk-50	p-519	p-517
sk-23	sk-23	sk-51	p-523	p-519
sk-24	sk-25	sk-52	p-525	p-520
sk-25	sk-22	sk-53	p-521	p-521
sk-26	sk-20	sk-54	p-491	p-523
sk-27	sk-26	sk-55	p-517	p-525
sk-28	sk-27			

5号掘立柱建物	P-522	P-452
---------	-------	-------

写真図版



1-1 深江城崎遺跡第1面全景（真上から）



1-2 谷部包含層遺物出土状況（真上から）

図版2



2-1 第1トレンチ全景



2-2 18号土坑検出状況



2-3 1号溝検出状況



2-4 谷部包含層土器出土状況



2-5 外来系大形器台



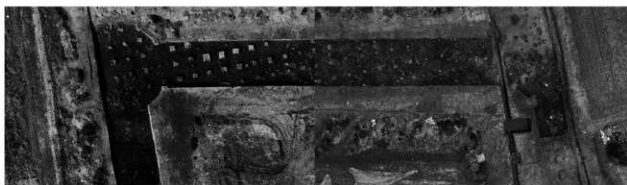
2-6 大形器台出土状況



3-1 L字形石件出土状況



3-2 槽蓋出土状況



3-3 深江城崎遺跡谷部包含層（真上から）



3-4 調査区北側土器群検出状況（第2面）



3-5 調査区南側土器群検出状況（第2面）

図版4



4-1 調査区南側土器群検出状況（第2面）



4-2 調査区南側土器群検出状況（第2面）



4-3 槽出土状況



4-4 把手付槽出土状況



4-5 背負子出土状況



4-6 広鎌出土状況



5-1 深江城崎遺跡第2面全景（真上から）



5-2 34号土坑切断材出土状況（北から）



5-3 51号土坑切断材出土状況（西から）



深江城崎遺跡出土遺物①



深江城崎遺跡出土遺物②



深江城崎遺跡出土遺物③

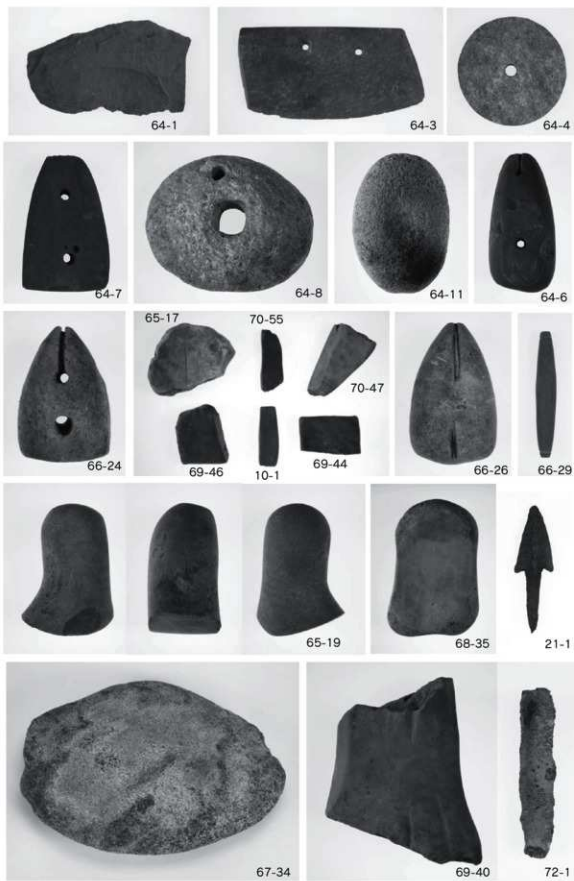


深江城崎遺跡出土遺物④

図版10



深江城崎遺跡出土遺物⑤



深江城崎遺跡出土遺物⑥



74-1



74-2



74-4



75-5



75-6



75-7



75-8



75-9



75-10



76-11



圖版14



80-26



81-35



81-34



82-36



81-32



82-38



82-37



82-40



82-39



83-41



83-47



83-43



83-42



83-44



83-46



83-45-1



83-45-2



83-48



85-64



84-52



84-54



84-55



84-56



84-53



84-58



84-57



84-49



85-62



85-63



85-66

85-65



88-94



88-93

圖版16



86-75



85-67



86-76



86-73



86-72



85-60



86-77



85-59



85-68



85-61



86-74



86-78



86-79



87-81



86-70



86-71



87-86



87-88



87-87



87-84



報 告 書 抄 録

フリガナ	フカエチクイセキダクン フカエジョウザキイセキ							
書名	深江地区遺跡群 深江城崎遺跡							
副書名	福岡県糸島市二丈深江字城崎所在遺跡の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
著者名	江崎靖隆（編集）・平尾和久・秋田雄也							
編集機関	糸島市							
所在地	〒819-1192 福岡県糸島市前原西一丁目1-1							
発行年月日	令和5（2023）年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
深江城崎遺跡	福岡県糸島市 二丈深江			33.5140	130.1430	2021/8/10 ～ 2022/3/31	2,101㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
深江城崎遺跡	集落	弥生古墳	掘立柱建物、溝、土坑		弥生土器、石器、木器、金属器		集落縁辺部で、外来系土器や木器が多く出土	

深 江 城 崎 遺 跡

—福岡県糸島市二丈深江字城崎所在遺跡の発掘調査報告書—

糸島市文化財調査報告書 第29集

令和5年(2023)3月31日

発 行 糸島市
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号
TEL 092-332-2093

印 刷 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5
TEL 0955-23-5188

